

地域貢献に役立つ人材育成と実習のあり方を考える

学校臨床心理専攻・信原孝司

1. 授業の概要

臨床心理基礎実習 1 は、心理臨床の専門性について、特に基礎的な知識と技術の習得を主な目的とした実習型の授業である。この科目は、臨床心理士を目指す大学院生にとっては必修科目であり、履修者のほとんどが臨床心理士資格の取得を目指していることにも特徴がある。なお、大学院入学後に最初に学ぶ心理臨床実習科目でもある。

2. 導入

授業では、昨年度までの履修生からの授業評価を参考に受容計画を立て、初回到授業予定を学生に周知徹底するようにしている。これによって学生は今後の見通しを持って授業に取り組むことが出来、事前に必要な予習して授業に臨む等の効果を期待している。

以下は今年度の授業内容である。

4	会話への誘い・ロールプレイ 3分
5	明確化・ロールプレイ 5分
6	ロールプレイ 5分
7	感情や情動・ロールプレイ 5分
8	ロールプレイ 7分
9	要約技法・ロールプレイ 7分
10	ロールプレイ 7分
11	技法の統合・ロールプレイ 10分
12	ロールプレイ 10分
13	試行カウンセリング
14	
15	

授業回	3時限 (知識)
1	オリエンテーション
2	専門性, 倫理
3	心理査定
4	心理学的処遇
5	
6	
7	様々な援助施設
8	
9	
10	精神医学的知識
以降	4限の授業を3限も使って実施

授業回	4時限 (技術) /11回以降は3時限も使用
1	オリエンテーション
2	基本的関わり技法・ロールプレイ 2分
3	関わり行動・ロールプレイ 3分

3. 授業内容

3時限目はテキストの調べ学習を中心とした基本的な知識習得のための授業である。履修生に担当を振り分け、担当項目の内容についてレジュメをまとめ、授業で発表し、全体でディスカッションする。

4時限目は心理療法の基本的な応答技術を習得するための授業である。3時限目と同様に各担当者がテキストをレジュメにまとめた発表の後、関連項目の技法習得のためのビデオを視聴し、2分～10分のロールプレイ（心理療法の模擬練習）を毎回実施（授業進行に応じて時間を延長）。最後に感想や質問を受ける時間を取っている。

なお、授業13回目以降は、それまでに習得した知識と技術の総仕上げとして、試行カウンセリング（心理療法の本番を想定した模擬実習）に入る。これは、履修生が各自で相談者役割を取ってくれる学生（深刻な心理的問題を持っていない健康な方）を探して依頼し、1回50分の心理療法の試行を5回に限って実施するものである。

4. 授業での工夫

限られた時間の中で盛り沢山の内容を習得するために、また最初の心理臨床実習であることから学び易くするために、以下の工夫を行っている。

I. 発表資料をまとめる際、インターネットの情報に頼らず、履修生が出来るだけ実際の文献に当たるように指示。

・・・専門用語の説明など、インターネットの検索で容易に調べられるものもあるが、出来るだけ専門文献を読んで理解し、何が大切かを自分の頭で取捨選択し、考えさせるように配慮した。

II. 履修生が自分達の意見を発表する形式（ディスカッション）を盛り込む。

・・・ディスカッションは毎回の授業で行なうが、履修生の質問には、出来るだけ受講者全員でディスカッションするようにした。教員が直接応えるのではなく、自分で考えたことを発表することによって、知識や技術の整理に役立たせるように配慮した。

III. 視聴覚映像を利用し、履修生の印象に残るような工夫。

・・・知識や技術の習得に役立つよう、可能な限り視聴覚映像を利用するように心掛けた。

IV. 毎授業の最後には、履修生からの質問を受け付ける時間を設置。

・・・授業が双方向となるようにするため、授業の最後には感想を述べてもらい、質問を受ける時間を設けるように配慮した。

5. 工夫への課題

授業での工夫には、次に述べるような課題があったので、以下に考察した。

I の課題・・・インターネットの情報に出来るだけ頼らず、実際の文献に直接当たるよう指示したものの、数は指定しなかった。そのことで、発表グループ間で引用文献や参考文献の数に偏りがあった。もちろん文献が多いから良い訳ではないが、具体的に数字を示した上で、発表の中身を工夫するような指示もあった方が良かったかも知れない。

II の課題・・・ディスカッションを如何に偏りなく活性化させるかが課題であった。感想や質問を述べる履修生を指定せず、任意に進行させているが、自発的に発表する履修生に偏りがみられる。順に指名するとしっかり発言してくれるので、自分の考えがなくて発言しないのではない。どのように自発的な発言に発展させ、ディスカッションを活性化させていくかは課題である（加えて、発言内容の質に注目する視点も今後は必要と思われる）。

III の課題・・・ビデオに限らず、出来るだけ視聴覚教材を使用したいと考えていたが、現時点では4時限目の技術の習得に限定されている。3時限目はテキストで取り上げる内容が盛り沢山であり、視聴覚教材のための時間を割くことが難し

い実情がある。テキストの内容に関連した事項も含めた視聴覚映像を用いるため、日頃から映像情報の収集が必要である。

IV の課題・・・質問・感想に関しては、時間不足もあった。質問・感想からディスカッションに展開する場合もあり、時間の許す限り自由な発展に進行したい気持ちがある一方で、授業予定の進行を守り過ぎた反省もある。今後は時間進行に少し幅を持たせるように心掛けたい。

6. 授業アンケート結果

履修生が提出したレポート中の授業評価では、授業内容や授業方法については支持的な評価が多かった。また、映像視聴とディスカッションの構成は支持が多かったので、今後もこの授業形態を継続する予定である。

昨年度までには質疑やディスカッションの方法や時間配分に課題があり、小グループによる短時間のディスカッション形式を取り入れたが、時間配分が不十分な時もあり、今後の継続的な課題となった。

7. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

本実習は、将来、高度専門職の臨床心理士としての勤務に直接結びつく授業内容を含んでいる。本実習で学んだ基礎・基本が社会人としての職場で活かされ、より良い研鑽に繋がることが、地域の県民、ひいては国民の福祉への貢献に繋がっていく。また教育としての実習で学んだ心理臨床への姿勢が、修士論文での研究活動にもつながり、それが地域貢献にも繋がっていくような、良い循環となっていくことが理想である。履修生にとっては、大学院入学後、初めての心理臨床実習でもあり、学び易さにも配慮しつつ、今後の授業実施を心掛けていきたい。